〈生命に生成し生命を生きること〉としての遊び
── ドゥルーズ＝ガタリの理論にもとづく遊び理論 ──

森　田　裕　之

1．遊びを発達の手段としてとらえる遊び理論

わが国の『幼稚園教育要領』第1章総則の「幼稚園教育の基本」には、次に述べる事項を重視して教育をおこなわなければならないとしている。

> 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらい（第2章に示すねらいとは、幼稚園修了までに育つことが期待される生きる力の基礎となる心情、意欲、態度などである）が総合的に達成されるようにすること[1]。（括弧内は引用者）

上の引用からわかるように、日本の幼稚園における教育実践を規定している『幼稚園教育要領』は、子どもの遊びを「心身の調和のとれた発達」のために必要不可欠な「学習」として位置づけ、「遊びを通しての指導」をおこなうように要請しているのである[2]。『幼稚園教育要領』に見られるこうした遊び観は、教育学における遊び理論によって背後から支えられ根拠づけられていることはいうまでもない。教育学において子どもの遊びは、大人の社会生活の模倣であり、子どもが成熟した大人へと発達するための練習であると考えられている。つまり、教育学における遊び理論は、遊びの目的を遊びそのもののなかにではなく遊びの外部にある発達のなかにもとめ、遊びを発達という目的を達成するための手段としてとらえる理論なのである。だからたとえば、ままごと遊びは母親の家事労働の模倣であり、子どもがよき母親になるための手段としてみなされることになるのだ[3]。

本稿では、このような〈遊びを発達の手段としてとらえる遊び理論〉がそれ自体誤った理論なのだということを指摘したい。そして、この偽りの遊び理論に替えて新たな遊び理論を提唱することを試みる。ところで、フランスの哲学者ドゥルーズ（Deleuze, G.）と精神科医ガタリ（Guattari, F.）は、共同で『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』とを著した。これらの書は、ニーチェ（Nietzsche, F. W.）の影のもとフロイト（Freud, S.）とマルクス（Marx, K. H.）を批判的に乗り超えつつ〈生命論〉と〈生命論を原理論として展開された資本主義論〉とを提示している[4]。本稿では、このドゥルーズ＝ガタリ[5]の〈生命論とそれにもとづく資本主義論〉を手がかりとして遊びにかんする考察を進めていくことにする。序章を閉じるにあたり、本稿が結論として提唱することになる遊び理論をラフに先取り

していうならば、その理論は遊びを、発達を執拗に追求する資本主義の教育から遠く超え出て、解放された生命に生成し、その生命を生き謳歌することとしてとらえる理論なのである[6]。

2．ドゥルーズ＝ガタリの理論 ── 生命論とそれにもとづく資本主義論 ──

（1） 生命論

次章以下で展開される遊びにかんする議論が依拠することになるドゥルーズ＝ガタリの理論をでき得るかぎりシンプルに描き出してみよう[7]。ドゥルーズ＝ガタリによれば、ブラウン運動をするかのように多方向にたえず流動し散乱している多数多様な「微粒子群」（particules）が「堆積」（accumulation）し「凝固」（coagulation）し「沈殿」（sédimentation）することによって、いいかえれば流動的な微粒子群が「地層化」（stratification）することによって「有機体」（organisme）という「地層」（strate）が構成されるという。つまり、有機体とは、あらゆる方向に流動し続け一定の「形式」（forme）をもたない微粒子群、ダイナミックで不安定な微粒子群が自らを限定し拘束することによって立ち現れるスタティックで安定したシステムなのだといえる。

このようにして構成された有機体は、ダイナミズムを取り戻し、ふたたび動き出すために、有機体というあり方から微粒子群というあり方へと「逃走」（fuite）し「脱地層化」（déstratification）する必要がある。有機体は流動的な微粒子群に「生成」（devenir）するのだ。しかし、脱地層化した微粒子群は、先と同様に地層化（＝堆積・凝固・沈殿）することによってふたたび有機体になる。生成によって現れたダイナミックで不安定な微粒子群は、ふたたび自らを限定し拘束することによってスタティックで安定した有機体に立ち戻るのだ。こうして、微粒子群と有機体とのあいだの絶え間ない交換が生じる。ドゥルーズ＝ガタリはこの交換のことを「生命」（vie）と呼ぶ。

それにしても、われわれは経験上、生命を、多方向に流動する多数多様な微粒子群としてではなく有機体としてとらえているではないか。われわれが現実に目にする生命は、諸々の原子の結合体である分子のようにまとまりを欠いた発散した「微粒子群としてのネコ」などではなく、統一的な個体性に収束した「一匹のネコ」という有機体である。そうなのであるから、上記のドゥルーズ＝ガタリの生命観はこう解釈することができる。すなわち、ドゥルーズ＝ガタリのいう微粒子群は、われわれにとって不可視の「潜在的なもの」として解釈することができ、有機体の地層は、潜在的なものとしての微粒子群が現実化したもの、われわれが直接目にすることのできる「現実的なもの」として解釈することができるのだ。このように解釈すれば、潜在的なものとしての微粒子群が有機体として表層へ上昇し現実化（＝地層化）し、現実的なものとしての有機体が微粒子群として深層に下降し回帰（＝脱地層化）するといった絶えざる揺れ動きこそ、生命なのだといい直すことができる。われわれはこの揺れ動きの全行程を細大漏らさずとらえることはできない。生命がもつダイナミズム（＝微粒子群）は、たえずわれわれの手からこぼれ落ちていき、われわれは単にそのダイナミズムの

馴致され安定した姿しか、表層に現れるそのダイナミズムの幻影しか直視することができないのである[8]。

以上に述べたドゥルーズ＝ガタリの生命論を明確にイメージするために、次のようなメタファーを引き合いに出してみたい[9]。いま、あたかもアメーバのようにたえず姿を変え、一定の形をもたないダイナミックな流動体があるとしよう。この流動体を写真にとったとすると、その写真のなかには静止し凝結し、一定の形を備えた流動体のスタティックな姿がはっきりと写し出されるはずである。少し時間をおいてもう一枚写真をとったとすれば、その写真のなかにも先と同様に流動体のスタティックな姿が立ち現れることになるだろう。しかし、被写体であるダイナミックな流動体は、時々刻々と形を変えているわけであるから、二枚目の写真のなかに写し出された流動体のスタティックな姿は、一枚目の写真のなかに写し出された流動体のスタティックな姿とは全体の布置が若干異なっているはずである。だから、二枚の写真のなかに写し出された流動体のスタティックな姿を見比べるならば、流動体がコマ送りで非連続的に運動したかのように認識される。しかし、その非連続的な運動の背後には、その運動を顕在化させる、ダイナミックな流動体の連続的な運動が潜在しているのである。

このメタファーをドゥルーズ＝ガタリの生命論に引き寄せてみるならば、潜在的なものとしての微粒子群は、被写体となっているダイナミックな流動体のようなものであり、それにたいして、微粒子群の地層化であり現実化である有機体は、写真のなかに写し出された流動体のスタティックな姿のようなものである。ドゥルーズ＝ガタリは有機体というスタティックで現実的な生命の背後に隠れ、その生命のあり方を生み出しているダイナミックで潜在的な生命（＝微粒子群）のことを「器官なき身体」(corps sans organes) と名づける。有機体は生命のすべてを説明できるわけではない。「非有機体的であるからこそ、なおさら強度的で強力な生命というものがあるのだ」[10]。この「強度的で強力な生命」こそ器官なき身体なのである。

（2）　生命論にもとづく資本主義論

上に見るように、有機体とは、ダイナミックで不安定な微粒子群である器官なき身体が地層化することによって出現するスタティックで安定したシステムである。ドゥルーズ＝ガタリによれば、この有機体が器官なき身体に向けて脱地層化するのではなく、より安定した新たな地層に向けて脱地層化することによって、換言すれば有機体が脱地層化し「再地層化」(restratification) することによって、社会という、より安定した地層が構成されるという。つまり、社会とは、有機体という地層のシステムがより堅固な安定性をもとめて自身をつくり変えることで現出する新たな地層のシステムなのだ。こうして成立する社会は、未開共同体としての「血統」(lignage) という地層のシステムである。この血統という地層を超越的な「専制君主」(despote) という地層が絶大な権力をもって支配する社会システムが専制君主国家である。そして、この専制君主という地層が玉座から引きずり下ろされることを契機として、「資本主義」(capitalisme) という前代未聞の巨大な社会システムが歴史の舞台に

登場するのだ。

しかし、資本主義が誕生するためには専制君主が玉座から追われるだけでは十分ではない。マルクスに寄り添いつつドゥルーズ＝ガタリは、〈流通手段としての貨幣〉が〈資本としての貨幣〉へと変容し、資本主義が誕生するためには、専制君主を廃位させるだけでなく貨幣と労働力が「遭遇」（rencontre）し「連接」（conjonction）し「反応」（réaction）し合うことが必要であるという[11]。これらの条件が出揃ったときはじめて、〈流通手段としての貨幣〉が〈資本としての貨幣〉へと転化するのだ。

ドゥルーズ＝ガタリによれば、この〈資本としての貨幣〉は「すべての生産に向けて下降し、生産力と生産の担い手とが分配配置される表面を構成する」[12]という。このことは、貨幣が購買によって、「生産力と生産の担い手」である〈生産手段と労働力〉へと形態転化し、〈貨幣としての資本〉が〈生産諸要素（＝生産手段と労働力）としての資本〉へと姿態転換することを意味している。そして、生産諸要素は剰余価値を含んだ商品を生み出し、その商品は販売によって、最初に投下した貨幣よりも剰余価値の分だけ多額の貨幣となる。つまり、生産諸要素が貨幣へと形態転化し、〈生産諸要素としての資本〉が〈貨幣としての資本〉へと姿態転換することになるのだ。ドゥルーズ＝ガタリはいう。「資本は貨幣の不毛性に貨幣が貨幣を生産する形態を与えることになる。それは剰余価値を生産し、自ら発芽し宇宙の端まで枝を拡げていくのである」[13]と。

前段の論述を端的に整理すれば、〈貨幣としての資本〉は〈生産諸要素としての資本〉へと変容し、〈生産諸要素としての資本〉は〈貨幣としての資本〉へと回帰するということである。このことをドゥルーズ＝ガタリは「資本」（capital）という主体の運動としてとらえ直す。すなわち、貨幣として地層化していた資本という主体が脱地層化し、生産諸要素のもとに再地層化し、生産諸要素として再地層化した資本という主体が脱地層化し、貨幣のもとに再地層化する運動としてとらえ直すわけである。資本という主体は脱地層化と再地層化とを交互に繰り返すのだ。そして、再地層化した資本という主体が、その都度その都度更新される〈資本＝主体〉という地層が、資本主義なのである。

ドゥルーズ＝ガタリは上に見た資本主義と、フロイトによって創始された「精神分析」（psychanalyse）とが対をなしていると考える。つまり、精神分析は〈資本＝主体〉の地層の外部に存在している解放された生命を拘束し回収する企てとして、資本主義と連動して登場してくると考えるのである。「精神分析は、実際の解放の企てに参加するどころか、最も一般的なブルジョワの抑制の活動に加担しているのだ」[14]。そして、ドゥルーズ＝ガタリは、精神分析が回収する生命のことを「分裂症」（schizophrénie）と名づける。

このように、精神分析は分裂症と名指された生命を回収する。それにしても、この生命の回収は象徴的な座標系のもとへの回収なのである。精神分析はこの座標系を設定するために「ファルス」（phallus）という項を導入する。ファルスはいうまでもなく実在の器官などではなく象徴的な器官であり、「シニフィアン」（signifiant）である。こうしたファルスを基準として、〈ファルスをもつものとしての父〉と〈去勢されファルスを欠いたものとしての

母〉と――ここでいう父・母も実在的な父・母ではなく象徴的な父・母であることは明らかだ――が分離した二項として配分され位置づけられることになる。つまり、ファルスというのは父・母という記号を一定のポジションに割りふる超越的シニフィアンなのである。こうして、ファルスを超越的な原点とし、父・母という二つの座標軸をもった象徴的な座標系が設定される。

この座標系のもとに分裂症という生命は回収される。そうすると、ファルスという超越者は父・母と同様に、回収された分裂症をも一定のポジションに割りふり固定することになる。つまり、ファルスは分裂症を、父から区別されると同時に母からも区別された「私」(moi)という主体として位置づけるのである。いうなればファルスは、分裂症にたいして、父や母と一体化することを禁止する――「母と近親相姦し父の地位を占めることを禁止する」[15]――「法」(loi)として機能しているのだ。こうして、父・母・私を頂点とした家庭的三角形、あの有名な「エディプス三角形」(triangle œdipien)が生成される[16]。精神分析は、〈資本＝主体〉という地層の欄外に存在している、分裂症という名の生命を、父・母のもとで生きる〈私＝主体〉という地層として、「永遠に〈パパーママ〉のみを消費して他の何ものにも目を向けない哀れな被造物」[17]として巧みに捕捉し回収するのだ[18]。

以上の論述はわれわれにこう教える。われわれは〈資本＝主体〉の地層のなかに巻き込まれ、永遠に剰余価値の生産に邁進するか、さもなければ精神分析によって〈私＝主体〉の地層として馴致されることを強いられるかだ、と。しかし、ドゥルーズ＝ガタリは、われわれのあり方は〈資本＝主体〉の地層のなかに包摂されたあり方や〈私＝主体〉の地層としてのあり方に限定されてしまうわけではなく、主体の地層から解放された別のあり方がたしかに存在するのだという。

ドゥルーズ＝ガタリによれば、有機体を模倣するものは、主体の地層から脱地層化し、器官なき身体に生成し、〈器官なき身体とその地層化である有機体との往還〉――上の生命論で見たように、この〈器官なき身体と有機体の往還〉は生命だ――を生きるという。例を挙げよう。生命論で見たように、〈有機体としての鳥〉は動き出すために脱地層化し〈器官なき身体としての鳥（＝微粒子群としての鳥）〉に生成し、〈器官なき身体としての鳥〉は〈有機体としての鳥〉へと地層化し、〈有機体としての鳥〉は〈器官なき身体としての鳥〉に生成し……というように続いていく。この〈有機体としての鳥〉の歌を模倣するものは、その模倣がこれ以上できないほどに極まったところで、模倣対象が脱地層化し〈器官なき身体としての鳥〉に生成するように主体の地層から脱地層化し〈器官なき身体としての鳥〉に生成する。そして、こうして生成した〈器官なき身体としての鳥〉は〈有機体としての鳥〉へ地層化し、〈有機体としての鳥〉は〈器官なき身体としての鳥〉に生成し……というように続く。つまり、生命（＝有機体）を模倣するものは、単なる模倣を知らず知らずのうちに超出し、主体の地層から生命（＝器官なき身体）に生成し、生命（＝器官なき身体と有機体の往還）を生きるのだ。

ドゥルーズ＝ガタリはいう。「鳥（＝有機体としての鳥）を描くとしよう。そこでは鳥（＝

器官なき身体としての鳥）への生成が起こるが、それは鳥（＝有機体としての鳥）自体が別のものに、純粋な線と純粋な色彩に（つまり〈器官なき身体としての鳥〉に）生成しつつあるからこそ可能なのだ。したがって、模倣するものがそうとは知らずに生成に足を踏み入れ、その生成が模倣対象の無自覚的な生成と連動するかぎりにおいて、模倣はおのずから崩壊するのだ」[19]（括弧内は引用者）。そして、ドゥルーズ＝ガタリはこのようにして生命（＝器官なき身体）に生成し、生命（＝器官なき身体と有機体の往還）を生きることを「芸術」（art）と呼ぶ。

それにしても、生命への生成を、精神分析が〈私＝主体〉として余すところなく回収してしまう分裂症という生命、絶対的に解放されることなく〈私＝主体〉化を甘受するしかない生命への単なる回帰と理解してはならない。それは、以前の色あせた生命への「退行」（régression）とは混同されず、〈資本＝主体〉からも〈私＝主体〉からも絶対的に解放された新しく輝かしい生命への「逆行」（involution）なのである。

以上から明らかなように、〈資本＝主体〉の地層のなかのあり方や〈私＝主体〉の地層としてのあり方のみがわれわれのあり方のすべてを汲みつくすわけではなく、われわれは芸術によって、主体の地層から逃走し、生命という創造的なあり方をも生きるのだ。われわれは「芸術によってそこ（＝主体の地層）から脱け出すだろう、ひたすら芸術によって」[20]（括弧内は引用者）。これこそがドゥルーズ＝ガタリの生命論とそれにもとづく資本主義論の最大の主張なのである。

3．〈遊びを発達の手段としてとらえる遊び理論〉は誤った理論である ── ドゥルーズ＝ガタリの理論にもとづいて ──

序章において予告したように、上で論じたドゥルーズ＝ガタリの理論を補助線として遊びについて考えてみよう。先に見たように、ドゥルーズ＝ガタリは、精神分析は〈資本＝主体〉の地層の外部にある生命を〈私＝主体〉の地層として回収する企てととらえた。ドゥルーズ＝ガタリは教育について論じていないが、教育も〈資本＝主体〉のなかに馴致されていない野生の生命を人間化し〈私＝主体〉化する企てなのだといえる。そうなのであるから、資本主義において教育は精神分析とパラレルな関係にあると考えることができる。つまり、教育は精神分析と同様に、〈資本＝主体〉の地層の外部に存在している生命を〈私＝主体〉の地層として回収し、エディプス三角形を構成する企てとしてとらえることができるのだ。ドゥルーズ＝ガタリは、精神分析が回収する生命のことを「分裂症」と命名したが、これにならって教育によって回収される生命に「動物性」という名を授けることにしたい。動物性という生命を〈私＝主体〉として回収し、エディプス三角形を構成した教育は次に、最終的に達成されるべき理想を目的として設定し、エディプス三角形という秩序を基盤としつつ〈私＝主体〉に直接働きかけることになる。この教育的働きかけによって〈私＝主体〉がより有能なものとなり、それと連動して、〈私＝主体〉が属するエディプス三角形全体の布置がより整序された形に組み替えられ更新されることになるのだ。このようにしてエディプス三角形の

布置が組み替えられ更新されることを「発達」と呼ぶことにする。

先に見たとおり、精神分析は分裂症という生命を回収し、エディプス三角形を構成する。したがって、エディプス三角形以前に実際に存在していたのは分裂症という生命ということになる。ところがドゥルーズ＝ガタリによれば、精神分析はエディプス三角形を構成すると、こう推論することになるという。すなわち、父・母・私が明確に「区別」(différenciation) されたエディプス三角形が構成される以前には、父・母・私が相互に溶融し渾然一体となった「未分化状態」(indifférencié) があったはずだ、と推論するのだ。こうして精神分析は未分化状態という虚構を捏造し、エディプス三角形という健全な状態にたいしてこの未分化状態に「神経症」(névrose) という病理の名を与え、さらに、過去に実在した分裂症をこの神経症にすり替えてしまうのである。以上のプロセスを経て精神分析は、エディプス三角形以前の状態を、本来は分裂症のなかにもとめるべきなのに、捏造された神経症のなかに見誤ることになるのだ。

上述のように、精神分析と教育はパラレルな関係にあると考えられる。したがって、前段で見た、ドゥルーズ＝ガタリの着想による精神分析にかんするロジックは、教育においても妥当性をもつといえる。教育の場合、エディプス三角形の秩序以前には動物性という生命が実在していた。そうであるにもかかわらず、教育は精神分析と同様の推論をおこなって無秩序な未分化状態という虚構を《捏造》し、エディプス三角形を基盤としておこなわれる教育的働きかけにたいして、この未分化状態に「遊び」という非教育的な名を冠する。さらに不当なことに、教育は動物性という過去の実在を遊びと名指された虚構に《すり替え》、あろうことかエディプス三角形以前の初期状態を遊びという未分化のカオスのなかに見てしまうのだ[21]。

《捏造－すり替え》という操作をおこなった教育は、〈私＝主体〉に直接働きかけ、発達を実現することになる。さらに、教育は遊びを発達の実現のために利用できるのではないかと目論み、発達にたいする遊びの有効性を見定めるために次の一連の操作を試みる。すなわち、教育は〈私＝主体〉をエディプス三角形（＝父・母・私が区別された差異構造）から遊び（＝父・母・私が一体化した未分化のカオス）へ移行させ、虚構にすぎない遊びを現実化させる。これによってエディプス三角形の秩序はいったん解体され無効になり、遊びのカオスが現実のものとなり立ち現れる。その上で、教育は〈私＝主体〉を遊びからエディプス三角形へと回帰させることでエディプス三角形を新規に構築する。こうして構築されたエディプス三角形の全体の配置は、出発点となったエディプス三角形とは異なっているはずである[22]。

このような一連の操作をおこなった後に、教育は発達の追求に躍起になるあまり、〈出発点のエディプス三角形〉と〈新規に構築されたエディプス三角形〉とのあいだの単なる差異を発達と《混同》し、遊びの結果として発達が成し遂げられたのだという重大な《誤認》をする。この誤認は教育にこう妄信させるに十分である。遊びは発達の手段として役立ち得るはずであり、〈遊び＝手段〉－〈発達＝目的〉というリジッドな関係が成り立つにちがいな

いと《妄信》させるに十分だ。こうして《捏造－すり替え－混同－誤認－妄信》という長い道程を経て、教育は遊びを発達の手段と考えるに至り、〈遊びを発達の手段としてとらえる遊び理論〉が成立するのである。

以上の論述から、〈遊びを発達の手段としてとらえる遊び理論〉の前提となっているのは、《捏造－すり替え－混同－誤認－妄信》という一連のプロセスなのだということがわかる。しかし、このプロセスはことごとく不当であり誤謬に満ちているのであるから、そのプロセスを前提として成立する〈遊びを発達の手段としてとらえる遊び理論〉もまた原理的に誤った理論なのだといえるのである。

4．遊びを〈生命に生成し生命を生きること〉としてとらえる遊び理論 ── ドゥルーズ＝ガタリの理論にもとづいて ──

上に見たように、〈遊びを発達の手段としてとらえる遊び理論〉は誤謬理論である。そうなのであるから、その理論を決然と否定し、それに替えて新たな遊び理論を提唱しなければならないのだ。

第2章の最後で詳細に論じたようにドゥルーズ＝ガタリによれば、生命（＝有機体）を模倣するものは、そうとは知らず主体の地層（＝〈資本＝主体〉や〈私＝主体〉といった地層）から生命（＝器官なき身体）に生成し生命（＝器官なき身体と有機体の往還）を生きるという。このとき、〈生命に生成し生命を生きること〉は「芸術」と呼ばれた。私は遊びを、上に振り返った芸術に引き寄せリンクさせて考えたい。つまり、ある行為をおこなうものが、その行為が極まり最高潮に達したところで、無自覚的に主体の地層（＝〈資本＝主体〉や〈私＝主体〉といった地層）から生命（＝器官なき身体）に生成し生命（＝器官なき身体と有機体の往還）を生きるとき、このようにして〈生命に生成し生命を生きること〉を「遊び」と呼びたいのである。遊びを導く行為は芸術のように模倣に限定されることなく、どんな些細な行為であっても一向に構わない。どんな行為であれ遊びになり得るのだ。このように考えるとき、遊びは芸術を包摂する、より豊かな生として立ち現れてくるのである。

前章でも述べたように、教育は最終的に達成されるべき目的を設定し、エディプス三角形という秩序を基盤として〈私＝主体〉に直接働きかける。この教育的働きかけによって〈私＝主体〉がより有能なものになるとともに、〈私＝主体〉が属するエディプス三角形全体の布置がより整序された形に組み替えられる。このエディプス三角形の組み替えのことを「発達」と呼んだ。つまり、発達というのは、整序されていないエディプス三角形からより整序されたエディプス三角形へと「上向」することをいうのだ。しかし、発達によって立ち現れた、より整序されたエディプス三角形は、教育によって設定された究極的で絶対的な目的に比べ劣ったものとみなされ、そのエディプス三角形には「否定」的な価値が付与されることになるのである。それにたいして、遊びと名指される〈生命に生成し生命を生きること〉は、〈器官なき身体から有機体への地層化〉と〈有機体から器官なき身体への脱地層化〉とを交互に繰り返しつつ「永遠回帰」することである。そして、生きられる生命（＝器官なき身体

と有機体の往還）は、最終的な目的などもたないのであるから、それ自体で絶対的に「肯定」されることになる。このように、〈生命に生成し生命を生きること〉は、発達という一方向的で否定的な変容には還元できない永遠回帰的で肯定的な変容なのである。

以上から本稿の結論として、〈遊びを発達の手段としてとらえる遊び理論〉に替えて、遊びを〈生命に生成し生命を生きること〉として、永遠回帰的で肯定的な変容としてとらえる新たな遊び理論を提唱する。しかし、こう提唱するからといって教育による発達を全面的に否定しているわけではない。そうではなくて、遊びを発達の論理に回収してしまう遊び理論に限定してそれを否定しているのである。〈生命に生成し生命を生きること〉としての遊びの論理とは別のレベルで、教育による発達はたしかに存在しているのだ。

第2章の〈生命論〉で見たようにドゥルーズ＝ガタリは、有機体の地層を否定し、器官なき身体の一方的な解放を謳っているわけではない。そうではなくて、生命には、有機体という、われわれに馴染みのあり方だけではなく、それを支える器官なき身体という不可視のあり方もあると主張しているのである。また、ドゥルーズ＝ガタリは、主体の地層という疎外を端的に拒絶し、生命を全面的にアナーキーに解放するようにわれわれを導いているとよくいわれる。しかし、第2章の〈生命論にもとづく資本主義論〉からわかるようにドゥルーズ＝ガタリは、われわれは主体の地層というあり方だけではなく、それから解放された生命というあり方をも生きていると主張しているのだ。このドゥルーズ＝ガタリの主張にならって、前段で述べた結論とともにこう主張したい。子どもは、教育のもとで発達する〈私＝主体〉というあり方だけではなく、遊びによって〈私＝主体〉を遠く超え出て生命に生成し、生命という解放された創造的なあり方をも生きると主張したいのである。そして、このように子どものあり方を考えることは、単にそれだけにとどまることなく、発達を唯一の原理とした既成の教育を新たに問い直しリニューアルする視座を提供してくれるはずである。この視座のもとで教育は、「〈私＝主体〉の発達」と「〈私＝主体〉を脱し〈生命に生成し生命を生きること〉」という、同一平面でとらえることのできない異質な二つのベクトルをもった新たな教育へと再構築されることになるのだ。

✣註

1）文部省告示『幼稚園教育要領』大蔵省印刷局、1998年、1頁。

2）『幼稚園教育要領』第1章総則の「幼稚園教育の基本」では、本文に引用した事項に加え、他に二つの事項をも重視して教育をおこなわなければならないとしている。本文に引用した事項は三つの事項のうち二番目に挙げられた事項である。ここで一番目と三番目に挙げられた事項を確認しておく。

一番目に挙げられた事項は「幼児は安定した情緒の下で自己を十分に発揮することにより発達に必要な体験を得ていくものであることを考慮して、幼児の主体的な活動を促し、幼児期にふさわしい生活が展開されるようにすること」である。三番目に挙げられた事項は「幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていくものであること、また、幼児の生活経験がそれぞれ異なることなどを考慮して、幼児一人一人の特性に応じ、発達の課題に即した指導を行うようにすること」である。この二つの事項からわかるように、『幼稚園教育要領』は、遊びだけではなく子ど

もが個々に営んでいる日常生活 ── 遊びとは異質なものとして考えられる日常生活 ── をも発達のための学習としてとらえようとするのである。

3）教育学における遊び理論については以下を参照した。矢野智司『ソクラテスのダブル・バインド ── 意味生成の教育人間学』世織書房、1996年、126-129頁。教育思想史学会編『教育思想事典』勁草書房、2000年の「遊び」の項。

ところで、『幼稚園教育要領解説』にはこんな文章がある。「幼児期の生活のほとんどは、遊びによって占められている。この遊びの本質は、人が周囲の事物や他の人たちと思うがままに多様な仕方で応答し合うことに夢中になり、時の経つのも忘れ、そのかかわり合いそのものを楽しむことにある。すなわち遊びは遊ぶこと自体が目的であって、人の役に立つ何らかの成果を生み出すことが目的ではない。しかし、幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な体験が多く含まれている。……自発的な活動としての遊びにおいて、幼児は心身全体を働かせ、様々な体験を通して心身の調和のとれた全体的な発達の基礎を築いていくのである。その意味で、自発的活動としての遊びは幼児期特有の学習なのである（傍点は引用者）」（文部省『幼稚園教育要領解説』フレーベル館、1999年、28頁）。このように、いったんは、遊びにおいて遊ぶこと自体が目的であるという遊びの本質をとらえておきながら、「しかし」という逆接の接続詞によって安易に前言を翻し、どういうわけか遊びを発達の手段として回収しようとするのだ。遊びにおいて万事がこのように進行する。それにしても、この「しかし」という語はどこから出てきたのか。その根拠はどこにあるのか。こう問うとき、この「しかし」という語がいかに欺瞞的に響くかがよくわかる。

4）ドゥルーズ＝ガタリは『千のプラトー』を『アンチ・オイディプス』の続編として位置づけ、これら二冊に「資本主義と分裂症」（capitalisme et schizophrénie）という総題を与えている。つまり、「資本主義と分裂症」の第一部が『アンチ・オイディプス』で、第二部が『千のプラトー』なのだ。こうした事情を考慮するならば、『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』で提示された理論を「資本主義と分裂症にかんする理論」と見るのが一般的であろう。しかし、ドゥルーズ＝ガタリにおいて分裂症というのは、生命という根源的なあり方の一つの特殊な現れとして解釈することができる。しかも、こうした生命にかんする理論が、資本主義について理論を展開する際の前提になっていると考えられる。以上から本稿では、『アンチ・オイディプス』と『千のプラトー』の理論を「生命論とそれにもとづく資本主義論」としてとらえる。

5）ここで「ドゥルーズ＝ガタリ」という表記法について一言述べておきたい。本文にも触れたように、ドゥルーズとガタリは共同で仕事をおこなった。「その著作はドゥルーズ、ガタリのどちらか一方が生み出したものでもないし、ドゥルーズとガタリ（Deleuze and Guattari）が生み出したものでもない（つまりドゥルーズとガタリの二人の思想の単なる並置でもない ── 引用者）。それは混成的・多様的で怪物的でさえあるもの、いいかえるならばドゥルーズ＝ガタリ（Deleuze-Guattari）が生み出したものなのである」（Bogue, R., “Gilles Deleuze and Félix Guattari”, in Bertens, H. and Natoli, J. (eds.), *Postmodernism: The Key Figures,* Blackwell Publishers, 2002, p. 103.［土田知則訳「ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリ」『キーパーソンで読むポストモダニズム』所収、新曜社、2005年、174頁］）。要するに、ドゥルーズとガタリの共同執筆による理論は、ドゥルーズ一人の理論でもガタリ一人の理論でもなく、また「ドゥルーズとガタリ」の理論でもなく、「ドゥルーズ＝ガタリ」という混成的で多様的な怪物の理論なのである。以上から本稿では、「ドゥルーズとガタリ」ではなく、一貫して「ドゥルーズ＝ガタリ」と表記することにしたい。

6）遊びにかんする先行研究は枚挙のいとまがない。たとえば、ホイジンガ（Huizinga, J.）の文化史的な遊び研究、カイヨワの社会学的な遊び研究、ピアジェ（Piaget, J.）の発達心理学的な遊び研究、

アンリオ（Henriot, J.）の現象学的な遊び研究、ベイトソン（Bateson, G.）のコミュニケーション論的な遊び研究……等々である。しかしここでは、本稿の議論とかかわりが深い矢野智司の遊び研究に言及しておく。矢野はベイトソンのコミュニケーション論を手がかりとして、〈遊びを発達の手段としてとらえる遊び理論〉という、教育学において宿痾のごとく根強い従来の遊び理論に異を唱え、遊びを、発達の論理には回収されない溶解体験（＝自己が世界と一体となる体験）としてとらえる理論を提示している。本稿の議論も矢野にならい、従来の遊び理論を保守し強化しようとする立場ではなく、その理論に敵対し批判しようとする立場に立つ。そして、ドゥルーズ＝ガタリのポストモダン理論という、矢野とは異なった観点から従来の遊び理論を明確に否定し、遊びを〈生命に生成し生命を生きること〉としてとらえる理論を新たに提示しようとするのである。しかし、矢野のいう溶解体験と、本稿が示す〈生命に生成し生命を生きること〉とがどの点で重なり、どの点で異なるのかについては稿を改めて検討しなければならない。矢野智司『ソクラテスのダブル・バインド－意味生成の教育人間学』。『自己変容という物語　生成・贈与・教育』金子書房、2000年。『動物絵本をめぐる冒険　動物――人間学のレッスン』勁草書房、2002年。

7）ドゥルーズ＝ガタリにかんする研究は、国外、国内を問わず多数にのぼり、ここでそれらのすべてを挙げることはできないので、とりわけ優れた二つの研究について言及しておく。アリエズ（Alliez, E.）はドゥルーズおよびドゥルーズ＝ガタリの哲学を「潜在的なものの存在論」として読み解き、ベルグソン（Bergson, H.）の哲学を受け継ぐ哲学として位置づけている。Alliez, E., *La signature du monde ou qu'est-ce que la philosophie de Deleuze et Guattari?,* Les Éditions du Cerf, 1993. *Deleuze philosophie virtuelle,* Synthélabo, 1996.［長友文史訳「ドゥルーズ、潜在の哲学」『現代思想　8月号第30巻第10号』所収、青土社、2002年］

また、バディウ（Badiou, A.）は、「存在の一義性」（univocitéde l'être）という概念がドゥルーズの哲学全体を貫いていているという（バディウはドゥルーズの哲学にしか言及していないが、この「ドゥルーズ」は「ドゥルーズ＝ガタリ」と置き換え可能であると考えられる）。この存在の一義性は潜在的なものであり、諸存在者の多数性として現実化するとされる。つまり、バディウもアリエズと同様にドゥルーズの哲学を「潜在的なものの存在論」と読むのである（しかし、バディウは、ドゥルーズの哲学がプラトニスムの顚倒を企てようとするにもかかわらず、実はプラトニスムに陥っているとして批判しているのであるが）。Badiou, A., *Deleuze,* Hachette Littératures, 1997.［鈴木創士訳『ドゥルーズ　存在の喧騒』河出書房新社、1998年］以下の論述で追々明らかとなるが、本稿もアリエズ・バディウとともに、ドゥルーズ＝ガタリの哲学を「潜在的なものの存在論」と読解するものとする。

8）前掲のバディウにしたがうならば、潜在的なものとしての微粒子群は、諸存在者を存在させる存在そのもの、諸存在者がそこから生み出される存在としてとらえられる。それにたいして、微粒子群の現実化である有機体（＝諸器官の組織化）は、存在が現実化した諸存在者、存在の幻影にすぎない諸存在者として考えられる。したがって、ドゥルーズ＝ガタリにおいて生命論はそのまま存在論に合流するのだ。

9）このメタファーは浅田彰『構造と力　記号論を超えて』勁草書房、1983年、121-122頁における卓抜なメタファーを参照してつくった。

10）Deleuze, G. et Guattari, F., *Mille plateaux: Capitalisme et schizophrénie,* Les Édition de Minuit, 1980, p. 628.［宇野邦一他訳『千のプラトー』河出書房新社、1994年、560頁］

11）マルクスの見事な定式が教えるように、資本主義が誕生するためには「貨幣所有者は、自由なる労働者を商品市場で見出さなければならぬ。二重の意味で自由である。すなわち、彼（＝労働者――引用者）は自由な人格として、自分の労働力を商品として処置しうるということ、彼は他方において、売る

べき他の商品をもっていないということ、すなわち、彼の労働力の現実化のために必要なる一切の物財から、放免され、自由であるということ（さらにいいかえるならば、生産手段をもっていないということ ── 引用者）である」（K. H. マルクス、F. エンゲルス編、向坂逸郎訳『資本論（一）』岩波書店（岩波文庫）1969年、294頁）。要するに、資本主義の誕生には貨幣所有者が二重の意味で自由な労働者 ── 人格的に自由であると同時に生産手段からも自由である労働者 ── を商品市場で見つける必要があるということだ。それにしても、貨幣所有者は〈人格化された貨幣〉すなわち〈貨幣の「派生機能」(fonction dérivée)〉であり、労働者は〈人格化された労働力〉すなわち〈労働力の派生機能〉であると考えられるので、ドゥルーズ＝ガタリは上に見た、マルクスによる定式を、本文にあるように抽象レベルを引き上げつついいかえるのである。

12) Deleuze, G. et Guattari, F., *L'anti-Œdipe: Capitalisme et schizophrénie,* Les Édition de Minuit, 1972, p. 16.［市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス』河出書房新社、1986年、23頁］

13) *Ibid.,* p. 16.［同書、23頁］

14) *Ibid.,* p. 59.［同書、66頁］

15) *Ibid.,* p. 83.［同書、91頁］

16) ファルスは、マルクスの価値形態論において貨幣が果たす役割と同じ役割を精神分析において果たしていると考えることができる。価値形態論において貨幣という一商品は、他のすべての商品の価値形態にたいして一般的等価形態として機能している。つまり、貨幣は他のすべての商品の価値を映し出す共通の鏡となっているわけである。これと同様にファルスも、父・母・私という三項にたいする共通の鏡になっていると考えることができる。父・母・私はそれぞれ、ファルスという共通の鏡のなかに自己を映し出すことによって自己を確認するのである。マルクスの価値形態論については次を参照。K.H. マルクス『資本論（一）』、88-129頁。

17) Deleuze, G. et Guattari, F., *L'anti-Œdipe,* p. 27.［『アンチ・オイディプス』、34頁］

18) ドゥルーズ＝ガタリの精神分析にかんする理論とラカン（Lacan, J.）の理論とのあいだの対応関係について簡単に触れておきたい。ラカンは母と幼児の直接的な双数関係を「想像界」(imaginaire) と名づける。この密室の母子関係に介入し、近親相姦の禁止の言葉を発するのが「大文字の他者」(Autre) である。この禁止によって直接的な双数関係は切断され、母と幼児はそれぞれ、大文字の他者を共通の鏡として自己を確証するに至る。こうして、母子が絡まり合う無媒介的な直接関係に代わって、大文字の他者を媒介項とした母子の差異構造が立ち現れることになるのだ。この差異構造は「象徴界」(symbolique) と呼ばれる。

以上のラカン理論をドゥルーズ＝ガタリの精神分析の理論に引き寄せてみれば、ラカンのいうところの「大文字の他者」はドゥルーズ＝ガタリの「ファルス」に、「象徴界」は「エディプス三角形」に対応していることが容易に了解されよう。このことと註16）とを合わせて考えるとき、ドゥルーズ＝ガタリの精神分析論・マルクスの価値形態論・ラカンの理論の三者のあいだに理論的同型性を見てとることができる。

ラカンについては次を参照。Lacan, J., *Écrits,* Les Éditions du Seuil, 1966.［宮本忠雄他訳『エクリⅠ・Ⅱ・Ⅲ』弘文堂、1972年・1977年・1981年］ *Le Séminaire Livre XI: Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse 1964,* Text établi par Miller, J.-A., Les Éditions du Seuil, 1973.［小出浩之他訳『精神分析の四基本概念』岩波書店、2000年］ラカンは多様な読まれ方をしているが、ラカン理論を、構造主義と関連させつつ想像界から象徴界への移行の理論として読み解いた研究としてアルチュセール（Althusser, L.）と浅田彰の研究がある。Althusser, L., "Freud et Lacan", 1964, in *Écrits sur la psychanalyse: Freud et Lacan,* Les Éditions STOCK/IMEC, 1993.［石田靖夫訳「フロ

イトとラカン」『フロイトとラカン　精神分析論集』所収、人文書院、2001年］浅田彰『構造と力　記号論を超えて』。上記のラカン理論の説明はこの二つの研究に多くを負っている。

19）Deleuze, G. et Guattari, F., *Mille plateaux,* p. 374.［『千のプラトー』、349-350頁］

20）*Ibid.,* p. 228.［同書、212頁］

21）教育にかんする議論のなかに、精神分析の概念であるエディプス三角形と未分化状態（＝エディプス・コンプレックス）とをもち込むことに疑義を抱くかもしれない。しかし、フロイトがいうように「人間として新たに生まれてきたものは誰でも、エディプス・コンプレクスを克服しなければならないという課題をあたえられる」（S. フロイト、懸田克躬・吉村博次訳「性欲論三篇」『フロイト著作集第五巻』所収、人文書院、1969年、81頁）とするならば、原則としてすべての人間が通過する教育においてもエディプス三角形と未分化状態とが問題なのだと考えることができよう。

22）エディプス三角形と遊びのあいだの往還によってエディプス三角形の全体の布置が組み替えられるという理論は、バタイユ（Bataille, G.）の生産／消費の理論とカイヨワ（Caillois, R.）の聖俗論とを参照して組み立てた。Caillois, R., *L'homme et le sacré, édition augmentée de trois appendices sur le sexe, le jeu, la guerre dans leurs rapports avec le sacré,* Les Éditions Gallimard, 1950.［塚原史他訳『人間と聖なるもの』せりか書房、1994年］Bataille, G., *La part maudite,* Les Éditions de Minuit, 1949.［生田耕作訳『呪われた部分』二見書房、1973年］

（もりたひろゆき　名古屋芸術大学短期大学部）